

生活科・くすの木タイム

生活・総合部 狩野 葵 佐藤 真樹 関口 雄基 下田 崇之
 研究協力者 大島みずき（生活科） 音山 若穂（総合）

I 生活科・くすの木タイムにおける「社会に変革を起こす子ども」について

自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方のできる子ども

本校の学校教育目標「つよく ただしく かしこく」を具体化した子どもの育成のためには、各教科等の学習指導要領を基に、本校の児童の実態を踏まえて捉えた資質・能力を育むことが必要である。生活科・くすの木タイムの問題解決的な学習では、「思いや願いの実現に向けて、人・もの・ことと関わり続ける資質・能力」の育成を目指す。この資質・能力と、生活科・くすの木タイムの問題解決的な学習の過程の具体は、以下のとおりである。

思いや願いの実現に向けて、人・もの・ことと関わり続ける資質・能力

(1) 知識及び技能

人・もの・ことの特徴・よさ及び人・もの・ことと関わる技能

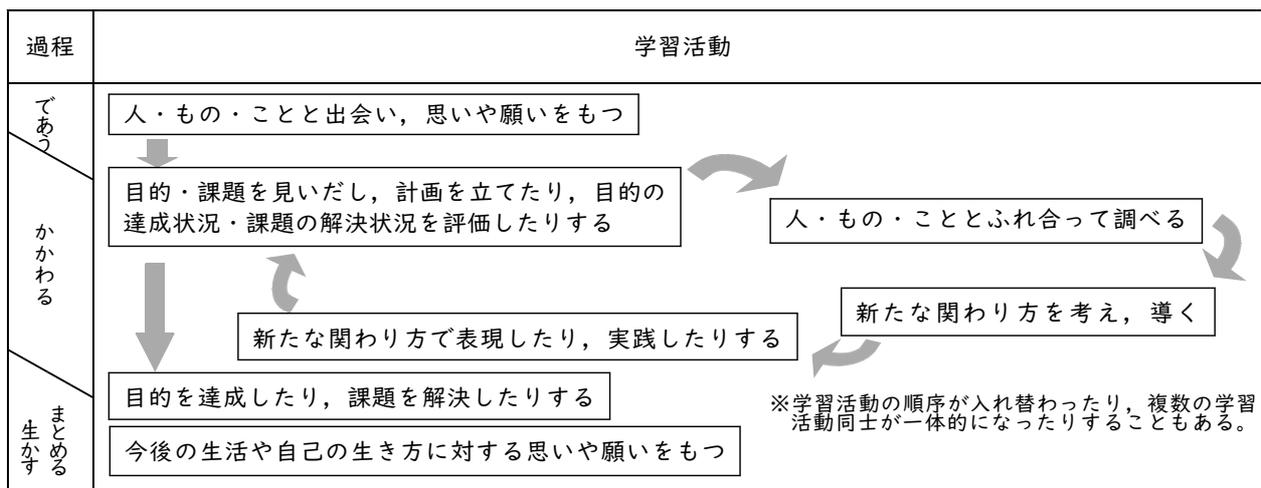
(2) 思考力，判断力，表現力等

人・もの・ことの特徴・よさ等を基に、目的・課題を見だし、関わり方を導き実践する力

(3) 学びに向かう力，人間性等

意欲や自信を高めながら、人・もの・ことに関わろうとする態度

<「思いや願いの実現に向けて、人・もの・ことと関わり続ける資質・能力」についての三つの柱>



生活科の学習の中では、児童は、人・もの・ことに出会い、それらの魅力やそれらと関わる楽しさ、憧れ等を基に、思いや願いをもつ。また、くすの木タイムの学習の中で児童は、社会や自然が抱える

<本校生活科・くすの木タイムの問題解決的な学習の過程>

問題に気づき、それらの問題に関わる人の思いや取組等に目を向けて、自分の思いや願いをもつ。見

児童は思いや願いを実現しようと、人・もの・ことの特徴・よさ、それらと関わる技能を関連付けながら、目的（生活科）・課題（くすの木タイム）を見いだし、特徴・よさを得ながら、関わり方を導き、実践することを繰り返していく。そして、思いや願いを実現できたことを他者と分かち合い、これまでの取組に手ごたえを感じながら、新たな思いや願いの実現に向かっていく。この中で、自他の関わり方を比べ、その共通点や相違点を見いだし、特徴・よさを基にした関わり方を表現する姿が見られた。その姿を見た他の児童は、自分の関わり方の改善点を見付ける姿が見られた。このことから、全体研究を受け、生活科・くすの木タイムにおける「社会に変革を起こす子ども」を「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方にできる子ども**」と具体化した。また、本研究で捉えた上記の姿は、資質・能力の三つの柱が相互に関係し合うことを活性化している姿であり、生活科・くすの木タイムの問題解決的な学習の中で、上記のような姿が現れることを積み重ねることにより、本校生活科・くすの木タイムで捉えた資質・能力を育成することができると考えた。

2 生活科・くすの木タイムにおける「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるための学習指導の工夫

本校生活科・くすの木タイムの研究・実践の中で、「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方にできる子ども**」は、以下のような、様々な情報の活用に長けていた。

教科等	活用される主な情報（自他の関わり方）
生活科	作品，説明書，観察カード，探検カード等
くすの木タイム	児童が見いだした話合いの視点，実態調査結果，実践評価結果，レシピ等

<生活科・くすの木タイムで活用される主な情報>

一方で、以下のように、情報の活用に課題のある児童の姿も見られた。

- ・自分のもつ特徴・よさのみを基にした関わり方に傾倒してしまい、他者の関わり方に目を向けることができない。【情報の収集】
- ・自他の関わり方を比較できず、関わり方の基となる特徴・よさの共通点や相違点を見いだすことができない。【情報の関連付け】

このことから、「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方にできる子ども**」の姿が現れるようにするために、「情報の収集」と「情報の関連付け」を重視し、次のような学習指導の工夫を行う。

自他の関わり方を見合う機会の設定（生活科・くすの木タイム）

生活科・くすの木タイムの学習の中で、「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・こ**

との特徴・よさを基にした関わり方にできる子ども」の姿が現れるようにするためには、児童が自他の関わり方を比較し、関わり方の基となる特徴・よさの共通点や相違点を見いだすことが大切である。そこで、自他の関わり方を見合う機会を設定する。この学習指導の工夫では、班や学級全体で、人・もの・ことに関わっている際の動画や関わった後の作品等の成果物の静止画、関わり方の案が書かれた付箋カード等を見合う。その際、タブレットや大型モニター等のICT機器を用いて関わり方を見合うことで、音声や動きを伴った自他の関わり方を、関わり方と関わった人・もの・ことからの反応との関係性に着目して比べることができる。また、関わり方を静止画や付箋の形にすることで、大量の関わり方を瞬時に共有し、比べることができる。

さらに、関わり方を見合う際には、その基となっている特徴・よさの共通点や相違点を見いだすことができるよう、視点を提示する。視点は、めあての達成や課題の解決に向かう関わり方になっていることを児童に問いかけながら設定する。以下はその例である。

【生活科】

人・もの・こと	学年・単元名	関わり方の提示の仕方	視点例
ペットボトルキャップ	1年「身近なもので遊ぼう」	ペットボトルキャップ遊びで作った作品の静止画	並べ方・積み方と楽しさ
ウサギ	2年「ウサギとなかよし」	ウサギを抱いている動画	腕・手・ウサギの位置とウサギの喜び具合

【くすの木タイム】

人・もの・こと	学年・単元名	関わり方の提示の仕方	視点例
地元食材料理	5年「広がれ！うんまい〇〇」	レシピや作った料理の静止画	前橋らしさ
		感想とともに試食している動画	食べた際の表情と発言

<関わり方の提示の仕方と視点例>

複数の関わり方から自分に必要な関わり方を選択できる場の工夫（生活科）

生活科の学習の中で、「自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方にできる子ども」の姿が現れるようにするためには、複数ある関わり方の中から、児童が必要感に応じて関わり方を選択することが大切である。そこで、複数の関わり方を選択できる場を工夫する。

例えば、動画や静止画等を、その種類によって複数のモニターに分けて教室の四方から提示したり、各グループにタブレットを配付したりすることが考えられる。そうすることで、児童は自らの必要感に応じてモニターを見たり、タブレットを操作したりして、自分の関わり方に生かせる動画や静止画等を選択することができる。

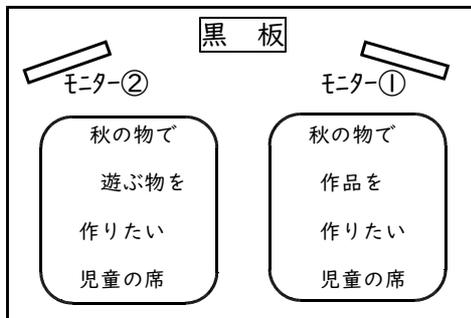
活動集団の規模	場の工夫	留意点
クラス全体または大グループでの活動の際	モニターの複数配置	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドショーによって、複数の関わり方を自動的に放映する（児童から制止等の要望があれば、受ける）。 ・提示する動画や静止画等が必要であろうグループの近くにモニターを設置する。
小グループでの活動の際	タブレットの配付	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的にグループに1台配付する。情報選択の操作は、児童に委ねる。

＜主な場の工夫と留意点＞

1年「あきの いいところ みつけた」

過年度の一年生の作品や遊ぶものから自分に必要な関わり方を選択できる場の工夫

第2～4時 秋の物を使った作品や遊ぶ物を作る計画を立て、作る活動



モニター①：過年度生が秋の物で作った複数の作品
モニター②：過年度生が秋の物で作った複数の遊ぶ物



＜教室環境の図＞

ねえ、テレビを見て。あんな風にまっぼっくりをたくさん積んだら、大きなツリーができるんだね。

大きいと飾りもいっぱい付けられそうだね。あとは…

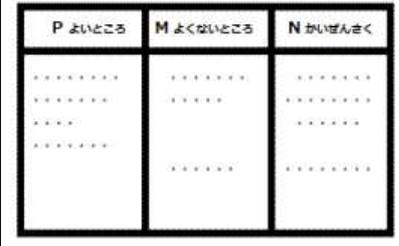
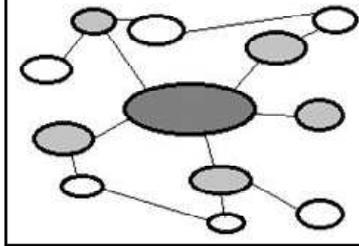
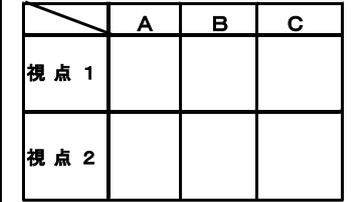


本当だ。じゃあ、私もやってみようかな。ドングリも間にささっているよ。これもいいね。

個人で、思考ツールを用いて関わり方を見いだす機会の設定（くすの木タイム）

くすの木タイムの学習の中で、「自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方のできる子ども」の姿が現れるようにするためには、児童が、自ら見いだした関わり方とその基となる人・もの・ことの特徴・よさを自覚することが大切である。そこで、個人で、思考ツールを用いて関わり方を見いだす機会の設定を行う。この機会は、集団追究をする前に設定する。一人1台ずつタブレットを配付し、関わり方の案や関わり方に対する評価等と思考ツールをタブレットに用意する。関わり方の案や関わり方に対する評価等は、前時までに児童が短冊や動画、静止画等に表したり、教師が本時までに児童の関わり方を見とって、短冊や動画、静止画等にまとめたりする。思考ツールは、使用することで、自他の関わり方のよさや関わり方の基となってい

る特徴・よさを可視化できるものである。児童は、課題の解決に向けて、この機会の中で自他の関わり方とその基となる特徴・よさを自覚することができる。

 <p style="text-align: center;">PMNシート</p> <p>これまでの自分たちの関わり方に対しての評価を整理し、新しい関わり方とこれまで得てきた特徴・よさとのつながりが可視化できる。</p>	 <p style="text-align: center;">ウェビングマップ</p> <p>これまでの関わりで得てきた特徴・よさを整理し、特徴・よさ同士のつながりを構造化できる。</p>	 <p style="text-align: center;">マトリクス</p> <p>関わり方の基となる人・もの・ことの特徴・よさを視点ごとに可視化できる。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<主な思考ツール例>

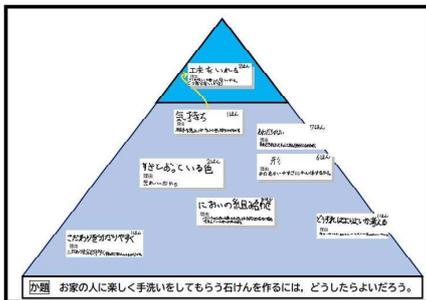
3年「オープン!ときめき石けん工房」

個人で、ピラミッドチャートを用いて関わり方を見いだす機会の設定

第20時 課題「お家の人を楽しんで手洗いでできる石けんを作るには、どうしたらよいのだろう。」

の答えとその根拠を話し合う活動

【ピラミッドチャートを用いて、自分なりの課題の答えを見いだす段階】



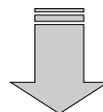
<個人で使用したピラミッドチャート>

前回考えた各班の石けんが喜んでもらった理由を見ると、たくさんあるな。「すきとおっている色」や「匂い」, 「形」は「工夫を入れる」にまとめられるな。カードを動かしてみよう。



<ピラミッドチャートを操作する様子>

【グループで話し合う段階】



ぼくは、相手のことを思う「気持ち」が一番大切だと思うよ。工夫も大切だけど、気持ちが入ってないよ。もらった相手は喜んでくれないよ。「気持ちが伝わってきて嬉しい。」って感想にもあったしね。



私は、色やにおい、形といった今までグループでこだわっていきたくて工夫を入れることが一番大切だと思うよ。お家の人感想に、工夫のいいところがたくさん書いてあるからね。

たしかに、色々な工夫を入れて作ったのは、お家の人に喜んでほしい気持ちがあったからだね。よりよい工夫にするために、相手の思う「気持ち」が一番大切なのかな。

3 成果と課題

本校生活科・くすの木タイムでは、「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方のできる子ども**」の姿が現れるよう、その授業における具体の姿や学習指導の工夫について研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

生活科では、友達や過年度の児童の関わり方に目を向けることで、自分の関わり方と比べ、自分の思いや願いに合った関わり方を試したり、相談したりする姿が見られた。その際、一緒に関わり方を試したり、友達の関わり方を伝えられたりした児童は、自分の関わり方のよさや不十分さを自覚し、人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方にしていた。

くすの木タイムでは、可視化された自他の関わり方を比べ、共通点や相違点を見だし、様々な面から捉えた人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方を友達に伝える姿が見られた。そのような関わり方を伝えられた児童は、友達の関わり方に納得し、今後の関わり方を決めることができていた。

これらの姿は、生活科・くすの木タイムで目指した、「**自他の関わり方を比べ、他者の関わり方を人・もの・ことの特徴・よさを基にした関わり方のできる子ども**」の姿である。これは、姿が現れるための学習指導の工夫により、児童が、自他の関わり方やその基となる特徴・よさに目を向け、その共通点や相違点を見出すことができたためであると考えられる。

○課題

生活科では、モニターやタブレットを用いて、他者の関わり方についての情報を得やすくするための場の工夫をしたが、人・もの・ことへの関わりに没頭するあまり、他者の関わり方を得ることができない子が一部見られた。今後は、情報をさらに得やすくするために、情報を提示するタイミングで音を鳴らすなど、情報に気付けるようにする学習指導の工夫を考えていく必要がある。

くすの木タイムでは、個人で関わり方を見出す際に、情報量が多すぎたため、個人の改善策が散漫になり、互いの共通点や相違点を見出すことが難しい場面が見られた。また、情報量が少なすぎたため、個人の改善策とその基となる特徴・よさに相違点が生まれず、新たな改善策を見出すことが難しい場面も見られた。今後は、発達段階や実態に応じた、児童が扱う情報の量とその効果についての学習指導の工夫を考えていく必要がある。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』平成30年2月，東洋館出版。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』平成30年2月，東洋館出版。
- ・田村学【編著】みらいの会【著】『生活・総合 アクティブラーニング』，2015年，東洋館出版。
- ・木村吉彦【著】『生活科の理論と実践―「生きる力」をはぐくむ教育のあり方』，2012年，日本文教出版。